

『資本論』における物神性論の構造

—「経済学」批判の基礎—

市岡 義章

On the Structure of Commodity Fetishism in *Capital* — the basis of critique on “political economy” —

Yoshiaki ICHIOKA

Abstract

Many students of Marxism have dealt with the theory of fetishism as an independent entity, and have not adequately considered it in relation with Marx' s economic theory. According to I.I.Rubin one reason for this interpretation is the position where the theory of fetishism is given in *Capital* by Marx. It is given separate heading, and put at the last place in Chapter 1. But this form does not correspond to the connections of Marx' s ideas. In this paper I argue that fetishism is an important ring of Marx' s commodity theory. Then I explain how commodity fetishism relates to the value substance and the form of value. And I conclude that the theory of fetishism is the basis of Marx' s entire economic system and particularly of his theory of value.

Key-Words

capital, fetishism, the form of value, value substance

序

「物神性Fetischcharakter」とは、近代社会における商品経済システムが自明性を帯びて、人々の意識を捉える事態について、マルクスが名付けたものである。人間が様々な関係行為を通じて生み出したものであるにもかかわらず、それがあたかも自然的な世界であるかのような相貌をもって人々の意識を規定し、永遠不滅の形態として自己了解される。そしてこのような自明性をもって行動する諸個人によって、市場経済が運行し持続する。

マルクスが「物神性」を主題として論じているのは、現行版（第4版）『資本論』では、第1巻第1編第1章においてである。本稿では、この第1章に焦点を絞り、マルクスにおいてこの概念が如何なる構造と意義を有するのか、明らかにしたい。

I 『資本論』物神性論の研究史

物神性論の研究史を簡単に振り返っておこう。マルクスの物神性に関説する文献は多数に上るが、取り上げるべき固有の研究はあまり多くない。

戦前期においては、特筆すべきものとして、ルービンの解釈がある。1920年代のソ連における「抽象的人間労働」をめぐる「価値論論争」において、ルービンは、価値実体の量的規定性が商品交換過程における物象的な諸関係に基づくものであることを明らかにし、独自のマルクス労働価値論解釈を示した^①。かれによれば、この物象的な諸関係こそ、『資本論』の労働価値論の基本前提を成すものであって、それが主題的に論じられているのが、現行版『資本論』第1巻第1章第4節「物神性とその秘密」である、とされる。かれはこの物神性論の労働価値論における意義が今まで十分に理解されな

かったのは、第1章「商品論」末尾に別途第4節として置かれているという篇別構成に負うところ大であるとし、第1章はこの物神性論から始めるべきであった、と言う（ルービン〔1930〕6-7）。ルービンの労働価値論解釈は、以下に明らかなように、本稿との共通性を多く持つ。しかし、かれがそこで論じている物神性は、かれ自身が指摘していることであるが、マルクス物神性論の一面に焦点を当てたものである（ルービン〔1930〕7）。むしろマルクスが第4節で主題的に論じているのは、ルービンが重視するような“物象の人格化”ではなく、“人格の物象化”という観点である。本稿ではこの後者の観点から『資本論』の物神性論の持つ意義を論じている。

わが国では、戦前期には、河上肇の考察がある。「価値形態論」における一般的等価形態についてのマルクスの叙述に着目し、貨幣形態に固有の「物神崇拜」すなわち「貨幣物神」として物神性の意義を強調している（河上〔1929〕第1編第1章）。これは、つぎに述べる宇野弘蔵に連なっていく。

戦前期から戦後期にかけては、宇野弘蔵の独自の解釈がある（宇野〔1950〕）。かれは、物神性を貨幣物神として狭義に理解する。この点では河上肇に通じるが、宇野の解釈は、かれ固有の経済学方法論というべき「流通浸透視角」（大島〔1961,1962〕）に導かれたものである。宇野は、共同体と共同体の間に始まる商品の交換関係（＝流過程）が、次第に各共同体の内部に浸透していく過程として、歴史を捉える。商品の流過程が、共同体の最深部の生産過程にまで浸透したとき、すなわち、労働力が商品化するに至ったとき、「純粹資本主義」という経済モデルが成立する、とされる。『資本論』第1巻第1編を宇野は流通論として把握し、純粹資本主義モデルが成立するのは、第2編以降の生産論に入ってからであるとする。したがって、『資本論』冒頭の第1章は流通論段階にあり、労働力の商品化を前提に成立する労働価値＝価値実体論はここでは論じえないとして、価値実体論なき商品論を展開するのである。それゆえに宇野においては、物神性論は実体論なき形態論として、すなわち貨幣形態に固有の属性として理解さ

れる。しかしながらこのような把握は、宇野経済学の物神性論ではあっても、マルクスのそれではない。後述するように、マルクスの労働価値＝価値実体論は、『資本論』第2編以降はもとより第1編においても、いわばその通奏低音のごとき基軸的な概念をなしていると考えられるからである。

戦後期には、宇野弘蔵のマルクス解釈は、多くの研究者を惹きつけ、いわゆる「宇野学派」を形成していく。「宇野学派」によるマルクス解釈の考察は、興味深い研究対象ではあるが、マルクスの『資本論』の解読という本稿の限定された課題のゆえに、ここでは論じない。戦後期の物神性論の注目すべき解釈として、廣松渉と平田清明のそれを取り上げよう。

廣松は、ハイデガーや現象学に依拠して、「共同主観的な存在構造」という、独自の存在論・認識論を構築した（廣松〔1972〕〔1974〕）。かれによれば、世界は、「所与als solchesと所与以上のあるものetwas Mehr」、あるいは「レアルとイデアール」という、「二肢的統一構造」として現象する。商品経済においては、レアルな商品体が、価値物というイデアールな属性、すなわち有意味性を帯びて人びとの意識を捉える。では、商品体の「イデアールな属性」である価値物とは何を指すのか？労働価値＝価値実体である。労働価値は、商品世界を構成する諸主体の日々の営為、すなわち生産という労働行為に基づいて形成される観念である。廣松の言葉を使えば、「共同主観的な社会意識」、すなわちある種の“イデオロギー”なのである。廣松においては、物神性とは、この“イデオロギー”に包摂され、労働価値という属性をおびて商品世界が成り立つことを自明視する意識の在り方のことである。このような廣松の解釈は、近代ヨーロッパ哲学の主体-客体の二元論を存在論の高みから止揚せんとする哲学的構えに依拠しつつ、マルクスをその嚆矢に位置づけようとするかれの遠大な試みのうちにある、と思われる。かれの解釈は、自らで切り開いた哲学の地平に依拠して、物神性という商品世界のイデオロギーの構造的解明を行った点で、研究史上画期的な業績のひとつにかぞえることができる。しばし「誤解される」ように、廣松は、マルクス

の物神性論を「イデアールな属性」という観念の構築物に括りこんでいるわけではない。すなわち、かれによれば、物神性とは、「歴史的・社会的な諸関係の一結節」(廣松 [1974] 106) として、間－主体的な関係行為によって産出される社会的形象物なのである。

この間－主体的な関係行為という論点を、マルクスの社会的生産有機体という概念に基づき、物神性論の歴史理論としての意義を論じたのは、平田清明である。かれは、物神性論を、現行版『資本論』第1巻第1章の基本テーマと位置付け、第4節に至る三つの節を、物神性論の解明の準備作業と見做す。かれは次のように述べる。

商品論第4節における物神性表象の追及は、ついに商品論全体の範疇検討と、論理的文脈の探求に駆り立てたのである。そしてふたたび、対象的仮象の世界すなわち価格という日常的宗教の支配する世界に、たどり着かねばならなかった。(平田 [1971] 375)

すなわち、価格という自明性をもって成り立つ商品世界の解明、換言すれば物神性論こそ、第1章「商品論」の全目的であったと言うのである。そして平田は、第4節の「物神性」の解明のためにその前に配置された3つの節を貫く基礎範疇として、つぎの三つを挙げる、(i) 社会的生産有機体、(ii) 抽象的人間労働、(iii) 価値形態(平田 [1971] 317)。この三つの基礎範疇を筆者なりに整理すれば、平田の物神性論理解の前提は、歴史的範疇として把握された生産有機体という実体的規定性を前提に、価値形態論が展開される、という構図である。

本稿は、以上の研究史を踏まえ、とりわけ平田の物神性理解の構図をひとつのステップとして、『資本論』における物神性論の構造と意義を明らかにしようとするものである。テキストとして、以下では、初版『資本論』を使い、必要に応じて適宜、現行版(第4版)を参照する⁽²⁾。

II 商品論の構造

資本論の冒頭章におけるマルクスの論述は、物神性という社会的意識成立の解明を、商品論という次元で

行うことを明らかにしたものである。冒頭でつぎのように述べる。

資本主義的生産が支配的に行われている社会の富は、「膨大な商品集積物」として現われ、一つ一つの商品はこういった富の要素形態 (Elementarform) として現われている。だから、われわれの研究は商品の分析から始まる。(Marx [1867] 1)

かれは、物神性の秘密を、市場経済社会の「要素」いわば「細胞」(Marx [1867] VIII) にあたる商品の考察を通じて、その本質的解明を図ろうとするのである。かれは、第1章(一)「商品」の節をその解明にあてる。

まずは、(一)「商品」の節の構成の概略を示しておく。初版では、この節の細目区分はないので、全97パラグラフに順に番号を付し表記する。

1：考察は「商品」から始まる。

2～18：商品の二要因—使用価値、価値(交換価値)—についての考察。

19～34：労働の二面性に基づき、使用価値と価値(交換価値)についての考察。

35～83：価値形態論

42～97：物神性論

さらに、初版では巻末に「付録」が付され、「価値形態論」の解説が行われる。

以下、順を追って「物神性論」に至るマルクスの叙述を考察する。

1 商品の二要因について

マルクスは「経済学批判序説」で明らかにした自らの経済学の方法、すなわち「下向法」と「上向法」に基づき、資本制社会の富の「要素形態」たる「商品」から上向の旅を始める(マルクス [1857-58])。かれは、『経済学批判』の「商品」の分析に依拠しつつ(Marx [1859] Kap.1)、商品の2要因すなわち使用価値と価値について述べる。

使用価値は商品の持つ有用性であり、商品の素材的内容を形成している。それは、社会や富の形態が如何なるものであろうと、いわば歴史貫通的に人類に供せられる財のもつ性質である。他方、価値は、商品に固有な社会的性質である。価値は交換価値として「ある

種の使用価値が多種の使用価値と交換しあう割合として現れる」(Marx [1867] 3)、すなわち、価格として現象する。こうして、商品は、使用価値を価値の「素材的な担い手」(Marx [1867] 2)として存在する。

では、価格すなわち、商品と商品との交換割合は何によってきまるのか。たとえば、1クオーターの小麦 = a ツェントナーの鉄といった、交換割合が成立している場合、この等式を成り立たせている両者に共通の質が存在しなくてはならない、とマルクスは述べる。すなわち、交換割合という量的な比較が成立するためには、両商品はなんらかの共通の質に還元されていなくてはならない。小麦と鉄という全く異なった使用価値 = 商品が交換の割合として等値されているのは、これら商品に共通の「第三のもの」が存在しているからである。かれは、この「第三のもの」を「交換価値の実体」と呼ぶ(Marx [1867] 3)。では、この「実体」とは何なのか。マルクスは言う、「使用対象あるいは財貨としては、諸商品は**物的に違っている**諸物である。しかし**価値であるwertsein**という点では商品は同一である。この同一性は自然から生じているのではなくて社会から生じている。多種多様の使用価値のうちにおいて違って表されているだけの、**共通の社会的実体**(gemeinsame gesellschaftliche Substanz)、それが**労働**なのである」(Marx [1867] 4)。交換価値の実体を労働にもとめるのは、当時であっては特異なものではなく、むしろ支配的な経済学(リカードウ派経済学)の常道とするところであった。では、マルクスにおいて、なぜ交換価値の実体が労働なのか。これについては、次節で論究する。

交換価値の実体は労働であるのだが、では交換割合を規定する「尺度」として、労働はどのように測られるのか。マルクスはつぎのように述べる。

労働そのものの尺度単位は**単純な平均労働**であって、この性格は、国や文化段階のちがいに依拠してちがうことは確かだが、ある現存の社会では与えられている。より複雑な労働は、**単純な労働の累乗されたもの**、あるいはむしろ**数倍されたもの**としか見なされず、したがって、たとえば、より少量の複雑労働は、より多量の単純労働に

等しいわけである。こうした還元(Reduktion)がどのように行われているかは、ここではどうでもよい。こうした還元が絶えずおこなわれているのは、経験の示すとおりである。(Marx [1867] 4)

では、その労働量はどのようにして測られるか。「労働の**継続時間**で測られ、**労働時間**の方は、時間とか日等々の如き**一定の時間部分**を尺度としている」、とマルクスは言う(Marx [1867] 5)。

以上のように、各商品の生産に投じられた労働は、マルクスによれば、社会的に平均化された労働への「還元」が、したがって共通の社会的な質をもった労働への「還元」が行われる。そしてこの等質化された労働は、「労働時間」として計測され、労働時間が価値の較量の「尺度」となる。

問題は、この「還元」がどのように行われるかである。しかしかれは、ここでは答えることなく、「経験の示すとおりである」と述べるにとどまる。この「還元」は、物神性論との関わりの中で説くべき問題のひとつなのであるが、後述することとしたい。

2 労働の二面性

以上のようにマルクスは商品の二要因の解明を行った後、つぎのように述べて、「労働」の考察に入る。

最初、**商品はわれわれには、使用価値と交換価値という二面性をもつもの**として現われていた。もっと詳しく考察すると、商品の中に含まれている労働もまた二面的であることが明らかになるであろう。この点は、わたしが初めて批判的に説明したのであって、経済学を理解するための跳躍点Springpunktである。(Marx [1867] 7)

上の引用からも明らかなように、マルクスが労働の「二面性」というのは、労働は使用価値を形成する労働と価値を形成する労働との二面において、現われてくるということである。ところで、「労働」は、マルクスの社会認識においてきわめて重要な役割を果たす概念である。初期の『経済学・哲学草稿』以来、かれの社会認識のいわば、基層をなすキー概念であるといっても過言でない。

マルクスは、人間社会を「生産有機体(Produktionsorganismus)」と、捉えている(例えば、Marx [1867]

37)。この把握は、初期の『パリ草稿』の「ミル評注」に最初のこれに関わる言説を見ることができるが、以後『ドイツ・イデオロギー』の歴史理論を経て、『資本論』草稿として1857年以降に書き溜められたノート群において彫琢を加えられ、『資本論』に結実していく流れを確認できる（森田〔1972〕、望月〔1973〕第2, 3章）。

生産有機体とは、人間は分業＝協業に基づく労働行為を通じて種の存続を果たしてきたわけだが、この機能体のことを言う。この故に、人間は必然的に共同的な存在（Gemeinwesen）である。共同的な存在としての人間は、生産有機体を通じて、人類史の長きにわたって歴史貫通的に生産活動を行ってきた。生産活動とは、さしあたっては使用価値の産出である。だから、マルクスはつぎのように述べる、「労働は、使用価値の形成者としては、有用な労働としては、あらゆる社会形態から独立した、人間の存在条件であり、すなわち、人間と自然との間の物質代謝を、したがって人間の生活を、媒介するための永遠的な自然必然なのである」（Marx〔1867〕9）。

では、交換価値の規定についてはどうか。

すでに見たように、交換価値とは商品間の交換割合のことであり、それを規定するのは労働量、すなわち社会的平均労働の時間であった。ペンディングしておいた「価値の実体」について論じよう。

生産有機体は、多数の人間たちの労働による分業＝協業をもって構成されている。したがって、分業＝協業を担う人間たちの労働は、生産有機体としての単一労働を構成する一分枝である。これは、歴史貫通的な、「あらゆる所有形態から独立している」（Marx〔1867〕9）事柄である。したがって、私的所有を前提とする商品の生産においても、事態は変わらない。労働によって生産される商品は、使用価値を形成するものとしての労働と、生産有機体の単一労働の一分枝として投入された労働という、「労働の二面性」によって規定されているのである。だが、生産物が商品という形態をとっている社会は、それ以前の共同体的な所有形態をとっている社会に対し、決定的に異なる点がある。すなわち、共同体においては、分業＝協業という共同性（ゲマイ

ンヴェーゼン）が、ゲマインシャフトGemeinschaftという交通形態をとっていたのに対し、商品経済社会では、この共同性は、ゲゼルシャフトGesellschaftという交通形態をとって存立するからである。「ゲマインシャフト」「ゲゼルシャフト」という用語は、テニエスに従って、前者については「地縁・血縁的な共同社会」、後者については「利益社会」と解されるのが一般的である。しかし、ここでは、マルクスの「ミル評注」の用語法にしたがい、前者については「協業に包摂された分業」を、また後者については「分業に包摂された協業」という意味で使用する。すなわち、ゲマインシャフトとは、個々の生産者によって営まれる労働の総体が共同体の直接的な支配と統制のもとに置かれているのに対し（「協業に包摂された分業」）、ゲゼルシャフトにおいては、労働の総体を担う個々の生産者の営みは、「独立して行われ互いに〔直接的には〕依存しあうことのない私的労働」としてなされる。個々の私的労働は商品販売を通じてその社会性が、すなわち、協業としてなされたことの意味が、事後的に確認される（分業に包摂された協業）。

この故に、ゲマインシャフトの交通形態においては、生産有機体の単一労働は可視的である。例えば、部族の長が労働編成をその構成員に割り当て、産出物を部族構成メンバーに配分するというように、生産有機体は使用価値の生産と配分をいわば可視的な協働行為として行うのである。しかし、ゲゼルシャフトの交通形態における商品生産にあつては、個々の生産者の労働はそれぞれ独立して「私的事業」として行われる。それは社会的分業の網目のなかでその一分枝として行われているのであるが、その私的事業が社会的な意味を持つか否かは、交換＝販売の実現という事後的結果としてのみ明らかになる。すなわち、個別的労働は結果として初めて社会性が、つまり協業としての営みが確認されるのである。ゲマインシャフトの交通形態のように、直接的にその社会性が担保されているわけではない³⁾。

さて、このようなゲゼルシャフトの交通形態の下で行われる商品の販売＝交換を規定する交換価値の実体

とは、ここに論じた、生産有機体の単一労働としての投下労働なのである。すなわち、「1クオーターの小麦 = a ツェントナーの鉄」の交換等式を基礎づけるのは、両商品に投下された生産有機体の単一労働の等量性なのである。マルクスは、これを、「抽象的人間労働 (abstrakter menschlicher Arbeit) (Marx [1867] 19) と名付ける。

つぎに問うべきなのは、この「抽象的人間労働」は、どのようにして認識できるのか、という問題である。上に見たように、ゲマインシャフトの交通形態においては、生産有機体の総社会労働の配分は可視的な事柄であった。他方、ゲゼルシャフトの交通形態に支配される商品経済社会においては、それはどのように認識され計測されるのが問われねばならない。ここから、マルクスは価値の形態規定性の解明に入る。いわゆる「価値形態論」である。節を改めて論じよう。

3 価値の形態規定

(1) 価値形態論

価値の実体たる抽象的人間労働はその量をどのようにして計測できるのか？マルクスは、これを、社会的な平均労働としての単位労働に還元し、それを労働時間で表示できると述べていた。「還元」については後述するとして、ここでは抽象的人間労働の量がどう認識されるのかを論じよう。

すでに見たように、商品経済社会以前のゲマインシャフトの交通形態においては、社会の総労働は可視的に認知され、共同体によって、労働編成の割り振りが、労働時間を使って行われた。しかし、ゲゼルシャフトの交通形態においては、それはあくまでも事後的にのみ認識されるのであって、事前には認識されえない。なぜなら、私的な事業として営まれる生産活動においては、生産された商品が市場で販売されて初めて、社会的総労働の一分枝として実現されるからである。だから、ある財の生産に多大な労働量が投入されたとしても、これが販売できなければ、価値実体は存在しえない。また、商品の生産にどれだけの労働量が投入されたかは、市場での評価、すなわち交換価値の事後的な決定に基づいて、社会的な平均労働の投入量として

決まる。そうなる、先の等式、「1クオーターの小麦 = a ツェントナーの鉄」は何を意味しているのだろうか。われわれは、これが市場での商品交換において成立した等式であることを、あらためて確認すべきである。以下、マルクスが挙げている「20エレのリンネル」の例を使って、この点を詳しく論じよう。

マルクスあるいは読者であるわれわれの眼前には、多様なそして膨大な量の商品の連鎖の世界が現われている。マルクスはその中から、ひとつの一定量の商品を取り上げ分析の対象に設定する。その商品は、「20エレのリンネル」である。すでに見たように、商品は「二重のもの、使用価値であってしかも価値である」。リンネルも、使用価値としては、商品体そのものの形態として、20エレのリンネルという「手でつかめる感覚的な現物形態」をすなわち「糊のきいた姿態」をわれわれの前にさらしている。だが、価値としてはこのリンネルはどのようにして、みずからを表現するのか、つまりわれわれはこのリンネルの価値の大きさをどのように認識できるのか。

すでに論じたように、価値とは商品の他商品に対する交換力であり、その実体は生産有機体の総労働を構成するその一部分である人間労働であった。しかし、ゲゼルシャフトの社会形態においては、労働の社会性が成立するのは、すなわち個々の商品の生産に投じられた労働が生産有機体の単一労働の一分枝たりうるのは、その労働によって生産された商品が市場において販売されることによってであった。商品経済社会においては、私的な事業者の人間労働は、それをもって生産された財が市場で販売されてはじめて、社会性を獲得できるのであった。この社会性を獲得した人間労働をマルクスは「抽象的人間労働」と名付けていた。つまり「20エレのリンネル」の価値は、他商品との交換 = 販売という二者関係の中で初めてその社会性と社会総労働への貢献度（つまり価値の大きさ）を確定されるのである。だから、「20エレのリンネル」の価値は、そのもっとも簡単な表現を交換対象である他の1商品との関係の中で初めて得るのである。マルクスは、その任意の1商品として上着を取り上げ、つぎのように

述べる。

20エレのリンネル = 1 着の上着、あるいは20エレのリンネルは1着の上着に値する。(Marx [1867] 764)

2商品の交換において成立する交換比率、そこにおいてしか価値量は認知しえないのであるから、商品価値は、相手商品の形態をもってしか表現できない。だから、マルクスにおいて商品価値の分析は「価値形態論」として展開される。そしてこの「最も単純な最も未発展な姿」にある商品の価値表現を、「単純な価値形態Einfache Werthform」と名付ける(Marx [1867] 764)。マルクスは、「すべての価値形態の秘密は、この単純な価値形態にひそんでいるにちがいない」(Marx [1867] 764)、と述べ、以下のように詳細な分析を行う。

この等式の意味は、すでに見たように、リンネルの価値を表現するということである。つまりリンネル所有者の立場を前提にしたリンネルの価値の表現である。この等式の左辺はリンネルすなわち自らの価値を表現する商品の形態であり、右辺はその価値を表現するために利用される素材である商品の着である。マルクスは前者を「相対的価値形態」、後者を「等価形態」と名付ける。繰り返すが、価値と価値量、つまり抽象的人間労働とその量は、市場での評価をまっぴらして「価値としての存在(wertsein)」を獲得できる。だから、この等式は、リンネルと上着という二つの商品の交換というシチュエーションの上に成立している。この等式は、二つの商品の交換が行なわれる時点で初めて、リンネルの所有者がその商品の価値を上着によって認識することを示している。勿論、上着所有者についても、同様の等式が成立するのであるが、この場合は相対的価値形態に上着が、等価形態にリンネルが位置することになる。

(2) 価値実体の量

問題は、価値実体の量がどのようにして決定され認識されるか、である。ここでは20エレのリンネルと1着の上着という交換比率が成立している。そしてそれが両商品の価値実体の等量性を表現している、と言われる。そのとおりなのであるが、留意すべきなのは、価値実体の等量性が20エレ対1着という交換比率を規

定しているのではなくて、20エレ対1着という交換比率が価値実体の等量性を規定している、ということである。1920年代の「価値論論争」が想起されるであろうが⁽⁴⁾、先に進もう。

マルクスは第4版でつぎのように述べる、

人間がかれらの労働生産物を互いに価値として関係させるのは、これらの物がかれらにとっては一樣な人間労働の単に物的な外皮として認められるからではない。逆である。かれらは、かれらの異種の諸生産物を互いに交換において価値として等値することによって、かれらのいろいろに違った労働を互いに人間労働として等値するのである。(Marx [1890] 88)

この点を説明すべく、マルクスは、「b) 量的に規定されていることは等価形態には含まれていない」、という項目の下に以下のように論じる。

「上着という形態をもっている一つの物がリンネルと直接に交換されうるといふこと、…一つの物のこのような等価形態は量的に規定されていることを少しも含まない」(Marx [1867] 768)。この叙述の数パラグラフ前の箇所、マルクスは、相対的価値形態にあるリンネルには価値実体の量的な規定性が含まれていることを明言していた(Marx [1867] 767-768)。しかし、等価形態については、独自の項目(b)をわざわざ設定したうえで、このように指摘する。かれのこの指摘が意味する理由はきわめて簡明である。すなわち、等価形態は相対的価値形態にある商品の価値を表現する「価値鏡」であって、等価形態にある自らの商品の価値量を示すものではない、ということである。だが、等価形態に量的な規定が含まれているかのように誤解される、とここでマルクスは言う、そしてその理由を次のように説明する。相対的価値形態にある商品の価値実体は量として定在している。等価形態は「鏡」として、これを映し出すわけであるが、自らの姿態に映じた「価値量」は、あたかも等価形態にある上着の価値量であるかのように取り違えられてしまうからだ、と。すなわち、この等式は両商品に等量の価値が存在しており、その故に、20エレ対1着の交換比率が成立するという把握に対して警告を発しているのである。

マルクスは、次のように述べている。「商品が交換価値の形態をもつのは、(1)他の商品体がその商品と交換可能であるがゆえに、その商品の価値としての存在が示され、(2)その商品の価値の大きさがその商品と他の商品とが交換されうる割合によって表現されるからである」(Marx [1867] 775)。「交換価値の形態」とは、商品の価値は他の商品の姿態によって表現され、認識されるという価値の形態規定性の謂いである。すでに指摘しておいたように、20エレのリンネル＝1着の上着は、両商品の交換を前提にした価値表現の等式であり、20エレ対1着という「交換されうる割合」が価値の大きさを表現し規定している、と言うのである。

これは、従来見過ごされてきた、だがルービンがすでに1920年代には指摘していた(ルービン [1930])、きわめて重大なマルクスの指摘である。しかし、われわれの文脈においては、きわめて当然のことであろう。すなわち、価値の実体規定が、交換という評価を経ることで初めて承認されるのであるとするならば、リンネルと上着という二つの商品の等量性は、その評価によって決定される。つまり、20エレ対1着という交換比率が、両当事者によっていわば行為事実として確定して後、両商品の価値実体の等量性が成立するのである。マルクスはつぎのように、述べる、

人びとは、その生産物を商品として関係させるためには、自分たちのいろいろな労働を抽象的な人間労働に等置することを強制されるのである。かれらはそれを知っている。しかし、かれらは、物質的な物を抽象物たる価値に還元することによって、それを行なうのである。これこそはかれらの頭脳其自然発生的な、したがって無意識的、本能的作用なのであって、この作用はかれらの特定の物質的生産様式と、その生産がかれらをそのなかに置くところの関係から必然的に生じてくるのである。第一にかれらの関係は実践的に存在している。第二に、かれらは人間なのだから、かれらの関係はかれらにとつての関係として存在している。(Marx [1867] 38)

商品生産という「特定の物質的生産様式」の下で「生産物を商品として関係させる」、すなわち商品の交換＝販売というシチュエーションが設定されている。まさ

に「かれらの関係は実践的に存在している」のである。ここにおいては、交換される2商品に等量の抽象的人間労働が投下されているから等価交換が行われるのではない。商品交換においては、「いろいろな労働を抽象的な人間労働に等置することを強制される」、すなわち交換という実践があって、そこにいわば事後的に抽象的人間労働の等置が成立する、とマルクスは言うのである。それは、「頭脳其自然発生的な、したがって無意識的、本能的作用」として行われる、社会的総労働の分割の問題である。そしてかれは、この作用が「特定の物質的生産様式と、その生産がかれらをそのなかに置くところの関係」すなわち、商品の生産様式と生産関係から「必然的に生じてくる」、と言うのである。

ここには、「行為の先行性」というマルクスの唯物論的な認識論がある。以下、この点について、節をあらためて論じておく。

(3) 行為の第一次性

上に指摘したように、マルクスの商品分析は交換＝販売という経済行為のシチュエーションを前提として行われている。この点をかれは、『資本論』第1巻第1章(二)「商品の交換過程」において、つぎのように明確に述べる。

直接的な生産物交換は、一面では単純な相対的価値形態を持っているが、他面ではまだそれを持っていない。この形態は、 x 量の商品A = y 量の商品Bであった。直接的な生産物交換の形態は、 x 量の使用対象A = y 量の使用対象Bである。AとBという物はこの場合には交換以前には商品ではなくて、交換によってはじめて商品になる。

(Marx [1867] 48)

交換という行為の事実があって、はじめてモノは商品になる、すなわち使用価値と価値という二つの性質を実現する商品になるのである。だが、そもそも財Aの x 量と財Bの y 量が交換されるということは、価値の等量性があって成り立つはずであるのに、交換以前にはその等量性自体が認識されえない。なぜならすでに論じたように、商品交換という事実を前提にして商品の価値形態が成立し、そこで価値量の認知がなされるのであるから。また、ここでは、二人の当事者は、互

いに相手の所持する商品の使用価値に対する欲望をもって相対しているかの前提がたてられているが、それは交換という事実が成立しているが故の等式である。二人の当事者がそれぞれ自分の所持するモノを欲望する相手が自分の欲しいモノをもっていることを認知することは、原理的には不可能である。かれらは立ちすくんでしまう。マルクスは言う、

わが商品所持者たちは、当惑のあまり、ファウストのように考え込む。初めに行為ありき、と。だから、かれらは、考えるより前に、すでに行っていたのである。商品の本性の諸法則は、商品所持者たちの自然本能において自分を実証しているのである。((Marx [1867] 47)

そしてマルクスは、さらに、このような“行為の事実性”、彼の言葉で表現すれば、「かれらの関係はかれらにとっての関係として存在している」という論点をふまて、歴史的な商品交換の発生と展開の過程をつぎのように論じるのである。商品交換はまず共同体と共同体との間にはじまる、そして諸物がひとたび共同体の間の対外的な商品になると、それらは、共同体の内部へと反作用し、次第に共同体の内部にも商品の交換関係が広がっていく、と ((Marx [1867] 49)。

マルクスは、以上のような、行為の先行性に基づく商品交換というシチュエーションのもとに、価値形態論の分析を行っているのである。

(4) 貨幣形態

商品は、使用価値という有用性をもって我々の生の営みを基礎づけ、そして価値を媒介にして相互のネットワークを形成し独自の世界を作り上げる。だが、言うまでもないことであるが、この商品世界は同時に貨幣が織り成す世界でもある。マルクスは以上の商品分析を踏まえ、貨幣の考察に向かう。

貨幣が商品であること、これは、マルクスが批判的な考察の対象としたスミスやリカードウなど、当時の主流派経済学にとっても自明の事実であった。問題は、商品たる貨幣が何ゆえに貨幣そのものとして存在するのか、これをかれらは明らかにすることなく、その自明性とどまっていたことにある。マルクスの論理の運びは明解である。上に明らかにした単純な価値形態

を前提にして、これに続く2階梯のメタモルフォーゼとして明らかにする。かれが依拠しているのは、ヘーゲル論理学のトリアーデ、普遍—特殊—個別である。

①単純な価値形態から貨幣形態へ

前提は単純な価値形態、20エレのリンネル = 1 着の上着という価値等式である。これは、眼前に広がる茫漠とした商品世界から、マルクスが個別の対象として拾い上げたリンネルという商品の価値形態であった。いうまでもなく、現実の商品世界では、このリンネルにしても、上着との交換関係を持つだけでなく、他の様々な商品と同様の関係を結ぶはずである。たとえば、20エレのリンネル = 10ポンドの茶、または = 40ポンドのコーヒー、または = 1クォーターの小麦、等々というように。それはリンネルだけでなく、他のすべての商品についても、同様の交換等式とその単純な価値形態の無限の列挙が続くはずである。マルクスは、このような単純な価値形態がモザイク状に寄せ集められた集合を、「全体的な価値形態 Totale Werthform」と名付ける。

全体的な価値形態の欠陥は明らかである。無数の商品が、それぞれ異なった価値の表現形態をもって対峙しあう。等価物はそれぞれの商品の価値を表現する素材、換言すれば価値の尺度財である。無数の尺度財の乱立はその役割を果しえない。一般的な商品交換の困難性は明らかである。この困難は共通の等価物の存在によって解決される。その論理上の解決は、すでに全体的な価値形態の中に与えられている、とマルクスは言う。要約しておこう。

全体的な価値形態は、ただ、単純な価値形態の諸等式の総計から成っているにすぎない。たとえば、

20エレのリンネル = 1 着の上着

20エレのリンネル = 10ポンドの茶、等々の総計

しかし、これらの等式は、それぞれ、逆関係の次のような同様の諸等式をも含んでいる。すなわち、

1 着の上着 = 20エレのリンネル

10ポンドの茶 = 20エレのリンネル、等々

したがって、リンネルの所持者がかれの商品を他の諸商品と交換し、またかれの商品の価値を一連の他の商

品で表現するならば、必然的に多くの他の商品所持者もまたかれらの商品をリンネルと交換していることになる。その結果かれらのいろいろな商品の価値を同じ第三の商品で、すなわちリンネルで表現することになるのだ、と (Marx [1867] 778)。

かくして、先の全体的な価値形態はつぎの形態に転変する。

1着の上着	=	}	20エレのリンネル
10ポンドの茶	=		
40ポンドのコーヒー	=		
1クオーターの小麦	=		
...	=		

マルクスは、これを「一般的な価値形態Allgemeine Werthform」と名付ける (Marx [1867] 779)。そして単一の等価物であるリンネルを「一般的な等価形態」とよぶ。一般的な価値形態の特色は一見して明らかであろう。相対的価値形態には無数の商品種類が列挙されるが、等価形態にはリンネルという一商品のみである。

先に見た、全体的な価値形態の不備、すなわち、共通の価値尺度の不在がここでは解決され、リンネルが統一的な、全商品に対する価値尺度財として登場しているのである。このリンネルこそ、貨幣形態を担う商品である。マルクスは、一般的等価物がリンネルに限らずあらゆる商品が該当する可能性を指摘している。しかし、貨幣商品たるにふさわしい素材性 (可分性、耐久性、携帯性など) を持つ商品である、貴金属 (とりわけ金・銀) がその座を最終的に担うことになったとしている。

②価値形態の展開の論理

以上の展開過程をわれわれは、以下のように整理できる。

マルクスの眼前には無数の商品の網目が広がっている。それは様々な財の交換 = 販売の絡み合いの世界である。かれはそこから、一つの商品リンネルを取り上げる。その商品は単純な価値形態という規定性を帯びて定在している。このリンネルという商品は無数の商品の中から偶然的に取り上げられた一つ、すなわち普

遍的個別である。ここでマルクスは自らの認識の準位を1階梯引き上げて、リンネル自身もその一つである多数者の集合を見下ろす視座へと移行する。多数者の集合とは、無数の個別が己が個別を主張しあい、競い合う、モザイク状の全体である。つまり特殊としての個別、これが全体的な価値形態である。マルクスは、自らの認識の準位をさらに一階梯引き上げて、このようなモザイク状の相互闘争的な商品世界を鳥瞰する。するとその闘争状態の商品世界に、闘争を終焉させる関係が伏在しているのを発見する。すなわち、一般的な価値形態である。一般的な等価形態に恒常的に位置する商品が確定されれば、尺度財は一商品に固定され、相互闘争は終焉する。一般的な価値形態の成立とは、抽象的人間労働という普遍を一個別商品種類が表現する位置を獲得することである。普遍を代表する個別、ヘーゲルはこれを概念的個別と呼んだ⁽⁵⁾。

③貨幣形態の特質

ここで留意すべきなのは、貨幣とは一般的な等価形態にある商品である、ということである。マルクスは、単純な価値形態を論じる箇所等価形態の特性を論じている。かれは、すでに指摘したように、等価形態にある商品は相対的価値形態にある商品の価値をその姿態でもって表現する「価値鏡」たることを明らかにしていた。と、同時にかれは、商品が等価形態にあることによって、相対的価値形態に位置する商品に対する支配力を持つことを論じている (Marx [1867] ,SS.22-23)。すなわち、交換関係にある2商品において、相対的価値形態にあるリンネルは上着との交換を望んで、等価形態の位置に上着を置き自らの価値を認識する。上着はリンネル所有者の欲望の対象として定在している。ここには上着のリンネルに対する支配力が生成している。すなわち、望まれる側が望む側に対して有する非対称な優位性である。交換が成立するか否かは、上着所有者が首を縦に振るか否かにかかっている。そしてかれが首を縦に振ったとき、リンネルに投げられた私的労働は、はじめて、抽象的な人間労働という社会的労働へと転化し、社会性を獲得できるのである。

かくして、一般的な等価形態に位置する商品 = 貨幣

は、この等価形態という特権的地位を確保し、独占する。貨幣を除く他のあらゆる商品はそしてその所有者は、等価形態に位置する貨幣によって支配され、そしてそれに服従する。

Ⅲ 物神性論の意義

ここまでマルクスが述べたことは何であったか。

社会的生産有機体は、商品経済に包摂される時、独自の様相をもって登場する。ここでは、労働は私的事業として行われ、労働の成果たる生産物が商品という形態を纏い、交換＝販売されることによって、労働は初めて社会的総労働の一分枝たりうる。人間の本源的営みである労働は、商品というモノの運動に仮託され、拘束される。かつての共同体においては、労働は直接的に社会的総労働の一部としてなされたのであるが、ここでは、労働はその生産物が商品として実現されることをもって始めてその社会性が実現されるのである。労働はモノに置き換わる。「労働の社会的な諸関係は、人びとの労働における人びとの直接的に社会的な諸関係として存在し現われるのではなくて、人びとの物的な諸関係または諸物の社会的な諸関係として存在し現われるのである」(Marx [1867] 39)。

マルクスは問う、「労働生産物が商品形態をとるとき、その謎のような性格はどこから生ずるのか？」(Marx [1867] 38)。明らかにその形態そのものからである。では「その謎のような性格」とは何か？端的に言えば、商品が価値をもつということ、あるいは貨幣が絶大な交換力＝支配力を有することがそれらモノの「自然的属性Natureigenschaften」(Marx [1872] 86)であるかのように人びとに映現する事態を指す。人間自身の関係行為が生み出したものであるにもかかわらず、あたかもモノ自身の属性であるかに倒錯視されること、これをマルクスは「商品の物神性」と呼ぶ(Marx [1867] 39)。すでに論じたように、かれは、初版『資本論』第1章(一)「商品」において、商品のこの「自然的属性」が人びとの間-主体的な協働行為による人為の産物であることを、全パラグラフをあてて明らかにした。

『資本論』首節における「物神性論」の意義として、

われわれは以下の3点を挙げることができる。

第一。市場経済社会は、交換価値という量的な等質性を前提に成り立っている。人びとは、使用価値としての様々な商品に囲まれそれを消費し生活するわけであるが、それらは同時に交換価値を「自然的属性」とするモノとして映現する。あらゆる経済的な営みは、この自明性を前提に成り立っているのである。すなわち、商品は交換価値＝価格をもつこと、生きるためには交換価値を支払って生活財を入手せねばならないこと、その交換価値を手に入れるためには自分の労働力を売りその交換価値を手に入れねばならないこと、また生産とは生産要素をしかるべき交換価値を支払って入手しそれを超える価格で販売すること等々……。マルクスの物神性論は商品世界のこの自明性の成り立ちを解明し、相対化した。

第二。すでに見たように、商品の物神性の根源には、生産有機体を形成する抽象的人間労働という価値の実体があった。すなわち、市場社会においては、人類史を貫徹するゲインヴェーゼンの人間労働が、商品というモノの姿を借りて、抽象的人間労働として現出しているのである。この意味で、商品の物神性は、近代という商品経済社会を根源において規定する、歴史範疇としてマルクスによって捉えられている。そのゆえに、かれは「ロビンソン・クルーソーの孤島生活」、ヨーロッパの中世社会、近未来に想定された「自由人のアソシエーション」、古代インカ帝国など多様な社会構成体との対質を図りつつ、商品の物神性が市場社会に特異なイデオロギーであることを論じているのである。

最後に、本論で後述を予告しておいた、価値量の決定の問題について述べておこう。当該箇所でも指摘したように、かれは価値量の決定について、「こうした還元(Reduktion)がどのように行われているかは、ここではどうでもよい。こうした還元がおこなわれているのは、経験の示すとおりである」(Marx [1867] 4)、と述べるに留めていた。しかし、マルクスは、「経験の示すとおりである」ところの「還元」の仕方を、物神性論を考察する箇所(第87パラグラフ)においてつぎのように論じているのである。やや長くなるが、引用し

ておく。

価値の大きさについて言えば、互いに独立に営まれているところの、といっても、自然発生的な分業の諸分枝であるがゆえに全面的に互いに依存しあっているところの、私的諸労働は、次のようなことによって、絶えずそれらの社会的に釣り合いのとれた標準に還元される(reducirt)のである。すなわち、かれらの諸生産物の偶然的な、そして絶えず変動する交換割合のなかでは、それらの生産物の生産のために社会的に必要な労働時間が、たとえばある人の頭上に家が崩れ落ちるときの重力の法則のように、規制的な自然法則として強力的に貫徹される、ということによって、そのような標準に還元されるのである。それだから、労働時間による価値の大きさの規定は、相対的な諸商品価値の現象的な諸運動の下に隠されている秘密なのである。生産者たち自身の社会的な運動がかれらにとっては諸物の運動の形態をもっているものであって、かれらは、この運動を制御するのではなくて、この運動によって制御されているのである。(Marx [1867] 39)

マルクスは、物象の運動が価値量を「社会的に釣り合いの取れた標準に還元する」と述べている。すなわち、物神性というイデオロギーに規定されて行動するわが経済人たちが作り上げる、あたかも自然法則であるかのごとくに貫徹する物象の「運動」が、価値量の決定を市場をとおして実現していく、とかれは論じる。ここで指摘されている物象の「運動」は、『資本論』体系では、第3巻「資本主義的生産の総過程」の叙述対象である。かれが注意深く「還元」問題をペンディングしていた理由もここにある。が、ともあれ、ここに物神性は資本制経済システムの中に自己を完結する。すなわち、「人格の物象化と物象の人格化」という物神性のオートノミーは、資本の蓄積＝再生産過程を基礎づけ、資本制社会を自己運動するシステムとして成立せしめるからである。

おわりに

以上において、われわれは、初版『資本論』第1巻第1章(一)「商品」の節の考察を通じて、マルクスの「物神性論」の構造の解明を行った。資本主義社会

の「要素形態」たる商品の分析に基づいて、マルクスは、資本主義という経済システムを維持し再生産していく、人びとの意識の在り方を「物神性」という概念を使って明らかにしたのであった。そしてわれわれは、物神性というこの商品経済に特異な意識形態が、マルクスにおいては、社会的分業＝協業という労働のゲマインヴェーゼンをベースにおいて構想されていることを示した。それは、価値実体論なき貨幣物神ではないし、また悟性的観念の構築物にとどまるものではなく、自然との物質代謝を通じて数百万年にわたって持続してきた、歴史の実体としての生産有機体をベースに構築された価値という概念に依拠したものである。しかし課題の限定上、割愛した論点は多数ある。物神性論の前提をなす価値実体ないしは抽象的人間労働は、つぎに論ずべきテーマであろう。とくに、本稿では関説しつつも具体的な論究を差し控えてきたルービンの論説については、稿を改めて論じたい。

注

- (1) 1920年代ソ連の「価値論論争」については、ルービン[1930]に付せられた訳者の解説を参照されたい。
- (2) ここで現行版というのは、1890年刊行のエンゲルスによる改訂第4版である。『資本論』第1巻初版が1867年に刊行された後、1872年にマルクス自身の手による改訂第2版が、また同年この第2版にかれが加筆訂正したものを底本にしたフランス語訳が刊行される。マルクス自身による『資本論』の刊行ないし改訂はここまでであってかれの死後、未完の第2、3巻はエンゲルスによって、また第4巻(『剰余価値学説史』)はカール・カウツキーによってそれぞれマルクスの草稿を整理・再編したものとして刊行される。ここで、われわれが考察する「物神性論」は、第一巻の首章に位置している。エンゲルスによる改訂第4版は、マルクスの改訂第2版を底本にして注記と誤植などの訂正(エンゲルス自身によるものであることが明記されている)のなされたものであり、テキストとしてこれを使用するに際し問

題はないかのように見える。だが、マルクス自身の手によって、『資本論』初版の第1章「商品と貨幣」ならびに第6章「資本の蓄積過程」は、第2版において大幅な改訂が行われている。とりわけ、前者については、マルクスは第2版後記において、つぎのように述べている。

第1巻第1節では、それぞれの交換価値が表現される諸等式の分析による価値の導出が、科学的にいっそう厳密になされている。また、第1版ではただ、暗示されていただけの価値実体と社会的必要労働時間による価値量の規定との関連も、明確に述べてある。第1章第3節（価値形態）は全部書き換えたがこれはすでに第1版の二重の記述から見ても必要なことだった〔「二重の記述」とは、マルクスが「価値形態論」を商品論の補足として第1巻の末尾に後から追加したことを指す〕。(Marx [1890] 18)

このような改訂は、勿論、マルクスも語っているように、「科学的にいっそう厳密になされている」のであり、彼自身の著述の進展として評価すべきものではある。しかし、他面、このことによって、初版において明解かつ簡潔に語られていた己が問題意識の所在が見えにくくなるということも、往々に在りうることである。ここで我々が考察せんとする、「物神性論」はそのひとつの事例であると思う。改訂第2版では、第1編第1章「商品」という章立ての下に、この第1章はさらに4つの節に区分され、物神性論はその最終節第4節に置かれている。他方、初版では、このような節区分なしに、第1章「商品と貨幣」(一)「商品」において一気に書きおろされ、さらに「価値形態論」については、本文を補足すべく「付録」が巻末に付されるという形態をとっている。たしかに改訂第2版は、「科学的に厳密に」表記されるに至っていると言えるのであろうが、他面、マルクスの問題意識が見えにくくなっていることも否定できない。この点を踏まえ、『資本論』とりわけ首節「商品論」における物神性論の意義を明らかにすることを目的とする本稿では、テキストとして初版を利用することとし、必要に応じて現行版（第4版）を参照することとしたい。

(3) マルクスの社会構成体論については、つぎの文献を参

考にされたい。マルクス [1843]、森田 [1972]、望月 [1973]。

(4) 竹永 [1997] 「IV翻訳者解説」、ルービン [1930] 「訳者解説」を参照。

(5) 普遍-特殊-個別のトリアーデについては、ヘーゲル [1817] 第3部「概念論」第1章「主観的概念」を参照。

文献

ヘーゲル、G.W.F. [1817] 牧野紀之訳『小論理学 下巻』鶏鳴出版、1985年。

平田清明 [1971] 『経済学と歴史認識』岩波書店、1971年。

廣松渉 [1972] 『世界の共同主観的存在構造』勁草書房、1972年。

廣松渉 [1974] 『資本論の哲学』現代評論社、1974年。

河上肇 [1929] 『資本論入門』青木文庫、1960年。

Marx, K. [1859] *Zur Kritik der politischen Oeconomie*, Erstes Heft, Dietz Verlag, 1968. 武田隆夫他訳『経済学批判』岩波文庫、1956年。

Marx, K. [1867] *Das Kapital, Bd.1*, Hamburg Verlag von Otto Meisner, 1867. 江夏美千穂訳『初版 資本論』幻燈社書店、1983年。引用文は必ずしも訳書どおりではない。傍点は原文のイタリックを示す。

Marx, K. [1890] *Das Kapital, Bd.1*, Zweite verbesserte Auflage, In: *Karl Marx, Friedrich Engels: Werke* Bd.23, Dietz Verlag, 1962. 岡崎次郎訳『資本論 第1巻』大月書店、1968年。引用文は必ずしも訳書どおりではない。傍点は原文のイタリックを示す。

マルクス、K. [1843] 山中隆次訳『マルクス・パリ草稿』御茶ノ水書房、2005年。

マルクス、K. [1857-58] 資本論草稿集翻訳委員会訳『マルクス資本論草稿集1』大月書店、1981年。

望月清司 [1973] 『マルクス歴史理論の研究』、岩波書店、1973年。

森田桐郎 [1972] 「ジェームズ・ミル評注」現代の理論編集部編『マルクス・コンメンタールI』、現代の理論社、1972年

大島雄一 [1961,1962] 「経済学体系と資本主義—いわゆる

宇野理論への一批判」(一)(二)『経済科学』第8巻

4号、1961年。同第9巻1号、1962年。

ルービン、I. I. [1930] 竹永進訳『マルクス価値論概

説』、法政大学出版局、1993年。

竹永進 [1997] 『ルービンと批判者たち』情況出版、1997

年。

宇野弘蔵 [1950] 『経済原論』上巻、岩波書店、1950年。